



宮町遺跡と紫香楽宮

滋賀大学教育学部

教授 小笠原好彦

調査の経過

2002年（平成14）は、東大寺の大仏が開眼してから1250年に当たる年で、これを記念する催しが東大寺や奈良国立博物館などで行われました。しかし、それに先だって聖武天皇がこの大仏の造立を、近江の信楽で行おうとしたことは、あまり知られていないように思います。

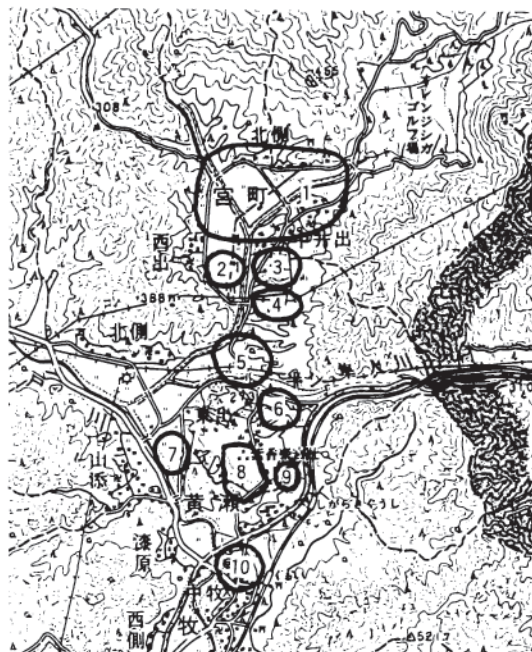
信楽町雲井地区の大字黄瀬・牧の内裏野には、史跡紫香楽宮跡があります。ここは、1923年（大正12）に黒板勝美氏の踏査によって紫香楽宮跡として史跡に指定されたところです。この史跡内には多数の礎石が残っており、西側に南から中門、金堂、講堂、鐘楼、経楼、僧房、東側に門、塔などの建物が配されており、東大寺とよく似た寺院の伽藍であることがわかります。そこで、この史跡は聖武天皇が造営した紫香楽宮を甲賀寺、あるいは近江国分寺としたなど諸説がだされてきました。

ところが、1969年から雲井地区で県営ほ場整備事業が行われ、この工事中、宮町地区で掘立柱建物の大きな柱根が3本見つかりました。その柱根の発見が契機となり、1984年（昭和59）から宮町遺跡の性格を明らかにする発掘調査が行われることになりました。

その第4次調査で、「奈加王」「垂見王」と記された木簡が出土し、第6次、7次調査で掘立柱建物や区画する塀などが検出されました。また、ほ場整備中に見つかった柱根と調査中に検出されたものの年代測定が行われ、天平14年、15年に伐採されたものであることが判明しました。これらの柱根の年代から、

宮町遺跡に紫香楽宮に関連する建物が構築されていた可能性ができました。

さらに、第13次調査では、建物が見つかったほかに、多量の木簡が出土しました。その中に越前から貢納された調の荷札木簡に天平15年、駿河国の堅魚につけられた木簡に天平13年と記されたものがありました。このうち天平15年のものは、『続日本紀』天平15年10月壬午（16日）条に、東海、東山、北陸3道の25国の今年の調庸を紫香楽宮へ貢進することを命じたことと一致するものです。また13年のものは、恭仁宮から運ばれたものです。



- | | |
|-----------|------------|
| 1. 宮町遺跡 | 2. 西出遺跡 |
| 3. 中井出西遺跡 | 4. 沢谷遺跡 |
| 5. 新宮神社遺跡 | 6. 鍛冶屋敷遺跡 |
| 7. 東出西遺跡 | 8. 史跡紫香楽宮跡 |
| 9. 東出遺跡 | 10. 雲井遺跡 |

雲井地区の奈良・平安時代の遺跡分布



紫香楽宮の朝堂院前殿

木簡は削屑がたくさん出土しました。この削屑は不要となった木簡の表面を、小刀で削り取って再使用した際にできたものです。このことは、削屑が出土した付近で、多くの官人たちが事務をとっていたことをうかがわせるものです。

このように、多量の木簡が出土したことは、この宮町遺跡に紫香楽宮に関連する官衙（役所）の一部が置かれていたことを想定させるものです。

さらに調査が進展し、2000年（平成12）10月、宮町遺跡の中央南半部で桁行22間（91・5m）以上、梁行4間（11・8メートル）の長大な南北棟建物が見つかりました。

この建物は、『続日本紀』天平17年正月乙丑（7日）条に記された朝堂の建物に推測されるものです。さらに、翌年の2001年11月には、その対称位置にあたる東側で東朝堂が検出され、さらに東西2つの朝堂の間に大型の東西棟建物2棟が前後に配されていたことも判明しました。しかも、北の建物は後に門に作り替えられ、その西北にも大型の東西棟建物が建てられていました。

宮町遺跡の建物・堀・溝

19年に及ぶこれまでの調査によって、宮町遺跡は北部地区と中央南地区から多くの建物が見つっています。まず、中央南地区では、朝堂に想定される2棟の長大な南北棟建物が対称に配されています。この2つの建物の間には、桁行9間、梁行4間の東西棟建物が朝

堂の北妻柱列と北側柱列の柱筋を揃えて配されています。また、大型の東西棟建物の北にも、桁行9間、梁行4間の大型東西棟建物があります。この北の大型建物は、後に桁行5間、梁行2間の門に作り替えられ、さらに、門の西北にも桁行7間、梁行5間の大型の東西棟建物が見つっています。

このように、中央南地区では、全体を区画する南北方向の堀は見つかりませんが、2棟の朝堂と大型の中心となる東西建物によって朝堂院を構成したものと推測されます。しかし、このような朝堂院は、平城宮、恭仁宮、難波宮の朝堂院にはみられません。そして『続日本紀』天平10年7月癸酉（7日）条に記されている平城宮の西池宮とされている建物遺構とよく類似することが注目されます。

一方の北部地区は、北側山地の裾部付近にあたることです。ここの中央北端地区では、東西棟建物で4面に庇をもつ大型建物S B 13230があり、付近に掘られた溝S D 13250・13256などから木簡が出土しています。

また、この地区の東150m付近にも、庇をもつ大型東西棟建物のS B 15102やS B 15103などが配されています。これらの建物の東西には、区画する南北堀も見つっています。

このように北部地区は、中央部と東部の2つの地区に分かれ、それぞれ大型建物が構築され、木簡も出土しているので、どのような性格をもつ建物群か今後の解明が期待できそうです。



紫香楽宮の東朝堂

このほかに、西地区でも、大型建物は見つかりませんが、建物や塀が設けられ、大きな空間を構成していたものと想定されます。

さらに、西南部地区では、南北に走る西大溝と東西溝が合流しています。この西大溝からは多量の木簡が出土し、東西溝は馬門川の旧流が流れこんでいたものとみられます。

このように、これまでの調査で、宮町遺跡に紫香楽宮の中枢部が設けられていたことが判明したことになります。さらに、検出されている遺構からみると、紫香楽宮に関連する建物が建てられた範囲はほぼ東西500m、南北450mに及ぶものと推測されます。

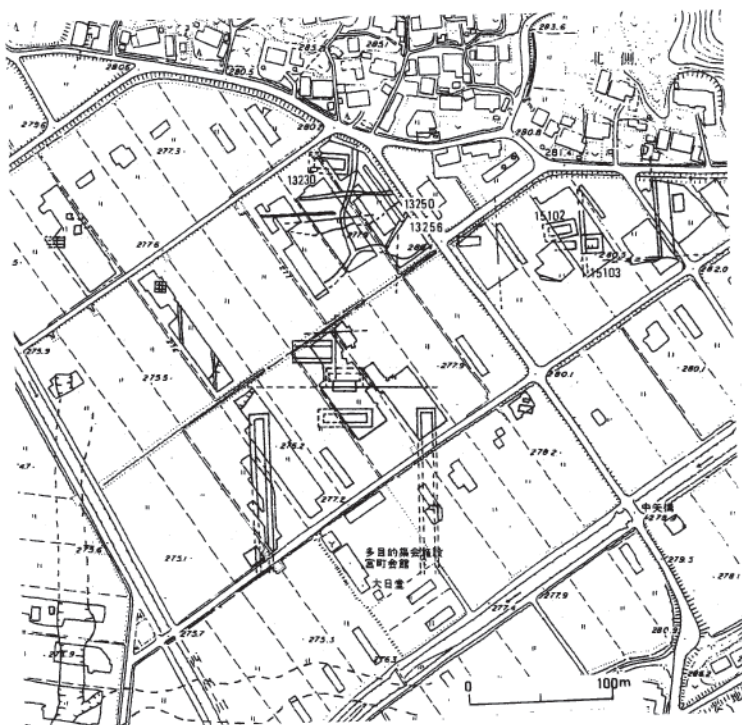
出土木簡の性格

宮町遺跡からは、すでに3000点を超える多くの木簡が出土しています。第4次調査で、初めて「奈加王」「垂見王」と王名を列記した木簡が出土し、この段階でこの遺跡が農村集落と異なることが想定されることになりました。この荷札木簡には、表に「越前国江沼郡八田郷戸主江沼五百依戸」、裏に「天□□五年十一月二日」と書かれていたもの、遠江国長下郡伊筑郷からだされた「天平十六年七月□」と記されたもの、「美濃国武義郡揖可郷庸米□斗」の木簡に、「天平十五年十一月」と記されているものなど、年紀が記された荷札木簡が少なくありません。これらの荷札木簡は、紫香楽で行われた大仏造立にともなって、天平15年10月16日に、東海、東山、北陸の25国の調庸を恭仁宮ではなく、紫香楽宮に貢進させたものものとみなされるものです。

また、「造大殿□」と記された木簡の断片があり、紫香来宮の造営を担った官司の下部部局とみなされ、これによって宮町

遺跡には「大殿」が構築されていたことが想定できます。しかも、規模の大きな殿舎ごとに、造営を担当する「所」が置かれていたものと推測することができます。ほかに、「山背司解」「皇后官」などと習書されたものも出土しており、これも重要です。

仏教関係では、「金光明寺」「請大徳□□」「□蓮華□」などと記したものがあります。金光明寺は、『続日本紀』天平16年丁丑（14日）条に、金明寺の大般若経を運んで紫香楽宮に到着し、朱雀門に入るころに、雅楽が演奏され、それらの大般若経を宮内の大安殿に安置し、200人の僧を招いて一日中、お経を転読させた記事があります。ほかに、「御炊殿」「御厨」「万病膏」と記された墨書土器も注目されるものです。これらのうち、万病膏は「延喜典薬寮式」に、大万病膏、千瘡病膏とともに左右近衛府、左右衛門府、左右兵衛府、兵庫寮、遣唐使、遣渤海使、遣新羅使などに支給されており、傷薬として使われていたことがわかります。



紫香楽宮の遺構

紫香楽宮造営の背景

天平12年（740）10月29日、藤原広嗣の乱のさ中、聖武天皇は平城京から伊勢国へ行幸しました。伊勢では伊勢大神宮に乱を鎮めるために幣帛を奉らせ、10日間とどまりました。この間に、広嗣が捕えられ、処刑した知らせも入りました。

しかし、天皇は平城京に戻らず、さらに桑名郡を経て美濃国に入り、不破頓宮に到着しました。その後、方向を変えて近江路をたどり、2月15日に山背国相楽郡の恭仁郷に至り、ここで恭仁宮と京の大造営が開始されることになったのです。

その後、天平14年（742）2月5日、恭仁京から新たに近江国甲賀郡に通ずる東北道が造られ、8月11日に、紫香楽村に行幸するため紫香楽宮の離宮が造営されました。この離宮へ行幸後、聖武天皇は翌年（743）7月26日に紫香楽宮への4度目の行幸を行い、その滞在中の10月15日に盧舎那大仏を造立する詔がだされ、甲賀寺の寺地が開かれることになったのです。

さらに、16年（744）2月には、恭仁宮・京から難波遷都が計画され、それを宣言する2日前の2月24日、なぜか聖武天皇は紫香楽宮に行幸しました。そして11月13日、『続日本紀』は天皇が盧舎那仏の体骨柱の縄を引いたことを記しています。

17年（745）の正月1日、紫香楽宮の宮門に大楯と鉾がたてられ、ここが首都であることが明らかにされました。この信楽の小盆地で、大仏造立が行われただけでなく、ここで政治をとるための紫香楽宮と官人と民衆が住む宮都が造営されたのです。

紫香楽宮には正門の朱雀門があり、宮中に御在所や大安殿が建てられました。そして17年正月には、御在所と大安殿で五位以上の官人による饗宴が催され、さらに朝堂で主典以上の官人たちによる饗宴が行われています。

このように紫香楽宮に朱雀門、御在所、大

安殿などが建てられていたのは、はたして14年に建てられた離宮の紫香楽宮と同一のものか、あるいは大規模に改修、もしくは別の場所に作られた紫香楽宮かが問題になります。これには宮町遺跡で見つかった紫香楽宮の遺構とどのような改修が行われたのか明らかにすることが必要です。



造大殿所

造大殿所の木簡

また、信楽では、盧遮那仏の大仏を造るために甲賀寺の寺地が開かれ、この大仏造立に行基が弟子を率い、多くの民衆とともに大事業が行われました。この大事業は、なぜか民間僧の行基が中核となって進められました。しかも、盧舎那仏の大造営は国家的事業でありながら、それまで例のない知識結いの形態で行われました。

しかし、天平17年（745）4月初めから山火事が相つぎ、4月末の27日には大地震が起り、その余震が続きました。5月5日、聖武天皇は恭仁京へ行幸し、さらに11日に平城京へ還都しました。この間、盧遮那仏の鑄造は、どこまで進展したのでしょうか。

参考文献

- 柴原永遠男「木簡からみた紫香楽宮」『糸里制・古代都市研究』16号 2001年
小笠原好彦『聖武天皇と紫香楽宮』新日本出版社 2002年

滋賀文化財教室シリーズ No.205号

発行年月日 2002年12月25日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525